

令和5年度 学校評価（報告書）

重点目標に対する具体的取り組み		主担当	評価	評価の観点 達成度判断基準	分析（成果と課題）
<b>重点目標1 「学びに向かう力（主体的に自分の頭で考える）」を育成する。</b>					
①	自己の在り方・生き方をテーマに入学時から組織的に取り組み、文理選択や進路研究に関するテーマについて時間をかけて丁寧に取り組んでいる。これらの一連の取り組みが「キャリア学習」の集大成として自らの進路目標に対し、どのように考え、取り組み、決定していくのか生徒の行動や判断に期待したい。一方、生徒の様子から見える課題については、しっかりと振り返り、検証を行った上で、次年度に活かしていく計画にしている。	探究科 学年会	B	A：できた B：概ねできた C：やや不十分だった D：不十分だった	1年次の文理選択から2年次での進路探究の発表に至るまでの流れが定着してきた印象がある。また、生徒たちのプレゼンテーション能力も予想以上に高く、クオリティの高さに感心させられる場面も少なくなかった。 今後の課題としては、3年次の進路志望および進路決定が、生徒本人の興味・関心と結びつくように、丁寧な進路支援が必要であると分析する。
②	各担任による計画的な面談と面談記録の保管は、これまで同様の取り組みを継続していく。また、面談を通じて知り得た情報は必ず学年主任や教育支援室、保健室などに相談・報告をして、情報の共有を図ることを徹底していく。さらに、内容によっては管理職や関係する組織との連携を取り合い、決して教員が1名だけで対応するようなことがないようにする。	企画運営委員会 学年会 担任	B	A：できた B：概ねできた C：やや不十分だった D：不十分だった	面談で得た情報を記録・保管、また関係教諭および関係する組織などで共有はできていた。担任は面談の必要性および重要性を認識し、時間をかけて生徒と向き合っていることが多かったようだ。一方、日々の変化をしっかりと把握するという観点では、面談の回数に十分というものはなく、まだまだ回数を重ねられる可能性もあると判断する。
③	自身の進路目標実現に向けて妥協しない姿勢、心構えを求めていく。そのためにも学習習慣の確立は不可欠なものであり、学年会と連携を図りながら生徒の学習状況の把握に努める。なお、その具体的な方策として朝学習では今年度も引き続きスタディサプリを活用し、生徒自身の積極的かつ継続的な学習習慣を促していく。また、放課後指導については、教職を目指す大学生による『実践型教育体験』を今年度も継続し、質問対応・生徒面談・補習授業への指導と助言などの取り組みを行っていく。	1年学年会 進路支援部	C	A：できた B：概ねできた C：やや不十分だった D：不十分だった	放課後の『実践型教育体験』も3年目を迎え、定着した取り組みとなってきた。毎日、自習室を利用する生徒が一定数おり、学校だけでなく生徒にとっても必要な企画となっている。特に調査前の利用率は高く、生徒・大学生の双方にとって良い時間と体験となっているようである。一方、動画視聴については、1年進学コースでは朝学習と連動し取り組んだものの、十分な効果が出ているとは言えない状況であった。
④	授業担当者は、生徒の実態を踏まえた授業の在り方や教授法を授業公開や研修などで研究し、常日頃から改善を図るよう心掛けなければならない。生徒が「主体的に自分の頭で考える」場が教育活動の至る所で用意されていなければならず、授業はまさにその最たるものであることを認識し、教科内でのPDCAの実践により、教科全体の指導力の向上に繋げていく。	企画運営委員会 教科会	B	A：できた B：概ねできた C：やや不十分だった D：不十分だった	時間通りに授業が開始し、落ち着いた雰囲気の中で授業が行われている点は評価できる。また、教科内研究授業では、各教科会議で指導案を検討し、共有を図ることができたことに加えて、教材への深い理解と授業展開を学ぶ良い機会ともなり、有益な実践となった。この取り組みは次年度も継続する必要があると認識している。
<b>重点目標2 Sコースおよび特進コースの学力強化を目指し、組織的に取り組み、結果を出す。</b>					
①	毎年開講している土曜講座に新たに「東大生特別講座」を設定した。これは、希望した生徒に対し現役東大生を講師として迎え、目標の立て方から学習方法を学ぶだけでなく、物事の捉え方や考え方も吸収していくことをねらいとしている。さらに、今年度の新しい取り組みとして「1日学習会」を企画した。これは自学自習に取り組む時間を6時間以上に設定し、生徒に充実感や達成感を体感してもらうことを目的としている。いずれも本校の特色である「面倒見の良さ」を体現したものであり、生徒の更なる学習意欲の向上に繋げていきたい。	進路支援部 学年会 教科会	B	A：できた B：概ねできた C：やや不十分だった D：不十分だった	各学年のSコースや特進コースの生徒は先陣を切って、どの取り組みにも前のめりに参加していたのが印象的であった。とりわけ、3年生は、最後まで粘り強く受験に挑み、自分達の進路決定のみならず、後輩にその姿を見せてくれていることが、次の学年の励みとなった。多様化する生徒のニーズに応えるよう教員が努めることと、懸命に努力を重ねる生徒が噛み合ったことが確実な進路決定に結びついており、今後も継続していくことが大切だと考える。
<b>重点目標3 スクール・ミッションおよびスクール・ポリシーの作成を契機として、本校のあり方を振り返る。</b>					
①	今年度より「スクール・ミッション、スクール・ポリシー研究」を担当するプロジェクトチームを新設した。新しい社会状況や生徒・保護者の変化を踏まえ、教育活動全般を見直すことは必要なことである。そこで、スクール・ミッション、スクールポリシーを作成していくプロセスは今後の本校のあり方を検討していく格好の場であり、「学習指導」・「特別活動」・「課外活動」など全ての教育活動の点検を行っていく良い機会と捉えたい。また、この見直しが本校を進める「新学習指導要領」における「観点別学習状況の評価」と相まって、より完成度の高い評価方法に昇華することを目指し、追究していく。	教務部 教科会	B	A：できた B：概ねできた C：やや不十分だった D：不十分だった	「スクール・ミッション、スクール・ポリシー研究」の取り組みを機に、多くの教員がこれまでの本校の教育実践や教育方針に触れる機会を得た。今後は、この研究成果を念頭に置きこれからの教育支援として、どのように具現化できるかということが課題である。また、「観点別学習状況評価」については、新課程3年目を迎え、一定の評価基準が完成してきたように思う。ただ、この評価についても常に研究を怠ることなく、よりの確でバランスの取れたものであるかを検証し、その完成度を高めていく必要があると考える。